

探訪 北の風景 106

村橋久成とビール工場 サッポロファクトリー

札幌市中央区

青木和弘

サッポロファクトリー（中央区北2東4）のある場所は1876（明治9）年、開拓使による日本で初めてのビール会社「札幌麦酒醸造所」が工場を設置した場所である。赤レンガの建物や煙突に「開拓使のシンボルだった」☆マーク「五稜星」が見える。この建造物は、民間払い下げ後の1892（明治25）年に建造された札幌麦酒株式会社（現サッポロファクトリー）の工場である。いまはサッポロファクトリーを象徴する「レンガ館」として、外壁などの改修を施し、ビアホールなど多彩な店舗が入って営業していた。現在は耐震補強工事のため一時閉鎖されている。

ビールを作って東京へも販路を広げる狙いがあった。1871（明治4）年、お雇い外国人の一人、化学者で鋳山技師のトーマス・アンチセルが後志管内共和町ホリカップで自生するホップを発見し、ビール作りを勧めていた。開拓使長官の黒田清隆は、ベルリン最大のビール会社で修業した中川清兵衛が、1875年に同社の修業証書を携えて帰国したことを知り、彼を雇用して東京で試験製造を行い、結果が良ければ札幌に移転させようと考えた。

そこに、「ビール作りに最も適した札幌でこそ最初に始めるべき」と主張する村橋久成が登場した。当時、村橋は開拓使東京出張所農業課で七等出仕（奏任官）という高等官で33歳。北海道での麦酒醸造所建設の稟議（りんぎ）書を開拓使上局に提出し、冷涼な気候と冬の雪氷はビール生産には欠かせないと主張した。

薩摩出身の村橋は家老まで務める由緒ある家系に生まれ、英国への藩留学生11人の一人に選ばれ、ロンドン大学法文学部で陸軍学術を学んでいる。2年間の予定を1年で帰藩したが、同国で見た、二頭立ての馬が農機具をひいて広大な農地をおこし畝（うね）をひく近代農業の光景が目には焼き付いたという。

一方、2歳年上の黒田は下級武士で、鳥羽伏見の戦いや戊辰戦争で軍人として戦功をあげて頭角を現し、村橋と上下の立場が逆転していた。

村橋は戊辰戦争で軍監を務め、箱館戦争では五稜郭に立てこもる榎本武揚らに降伏を働きかける



吹き抜けのアトリウムでは、四季折々、多彩なイベントが開催されている。周囲にさまざまな飲食店が揃って、思い思いに過ごすことができる人気スポットだ。この日は、不動産関係のイベントがあり、風船や射的などのブースも並んでいた

など、度々文書に名前が出てくるのだが、黒田になびかない生きざまが損をさせたのか、開拓使で黒田からは終始低い評価に甘んじた。札幌での麦酒醸造所設立は村橋の稟議通り、黒田も含め満場一致で決まり、事業は順調に成果を上げた。

田中和夫氏の小説『残響』は村橋久成の開拓使時代を描いた小説だ。道庁に保存された公文書などの資料約1万3千200冊にあたり、村橋の足取りをたどった。田中氏の取材ノートによると、閲覧数は、函館市立中央図書館や北大図書館、道立図書館などの資料も含めて500冊にも達した。達筆な毛筆書きを読むため、古文書解読を初歩から勉強して取り組んだと「あとがき」に記している。

村橋が手掛けたのはビール工場だけではない。農業や製業全般の近代化に取り組み、琴似屯田兵村の配置、七重開墾場の洋式化、石狩の缶詰工





サッポロファクトリー「レンガ館」(札幌市中央区北2条東4丁目)。左側の建物には写真スタジオが入っていて、右奥は耐震補強工事で現在、閉鎖されている。閉鎖前はビヤホールや、さまざまな手工芸品店などが入って賑わっていた

煙突広場の「開拓使麦酒醸造所・見学館」では無料で醸造所のあゆみや仕込み窯やろ過槽などを見られる



小説『残響』田中和男著。サッポロ叢書と文化ジャーナル鹿兒島社から復刻版が出たが前者は在庫切れだ

札幌麦酒醸造所の事業とシンボルマークの五稜星は、現在もサッポロビールに引き継がれている。

場、葡萄酒醸造所、製糸所、鶏卵孵化場、仮博物場、放羊場の創設など、さまざまな事業を立ち上げている。

しかし、私欲をあさる高級官僚の姿や、開拓使が設立した事業の利権絡みの民間払い下げなどに憤り、1881(明治14)年、村橋は職を辞し、やがて消息が途絶える。

10年ほどが経った1892年9月25日、神戸市郊外の路傍で倒れた姿で見つかり、4日後に収容先で亡くなったと現地の新聞が伝えた。「北海道久成会」のホームページによると、村橋を知る者たちに衝撃が走った。香典料人名帳に通信大臣黒田清隆が筆頭に署名し、時任爲基や陸奥宗光、堀基、永山武四郎などそうそうたるメンバー30人が名を連ね、破格の香典を寄せた。葬儀は10月23日、青山墓地式場で行われ、黒田ら在京の者たちが参列したという。墓は青山墓地にある。